ONE PIECE　神の巫女

裏鏡　　美委

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　神の巫女

【Ｎコード】
Ｎ５１０３Ｓ

【作者名】
裏鏡　美委

【あらすじ】
時は大海賊時代。――――って。格好つけるような事は書かないよ！俺の名前はクリムゾン・Ｄ・シーク。どっかで聞いた事あるだろー？そうっあの麦わら海賊団の船長、モンキー・Ｄ・ルフィの義妹！！・・・そう、義妹。今、「あれ？」っとか思ったやつ！！明後日のテストの点は９７点だっ！っと、色々あって俺の通り名は「神の巫女」ってやつだ。何の実かは、見てからのお楽しみだ♪俺は、世界一の情報屋とかも言われた事あるが・・・夢は、海軍をぶっつぶす！！

第一話　再開　　～ナミが病気！？海に降る雪の向こうに～

ここはのどかな・・・海の上

ギンギンと照りつける太陽の光りが海面に反射して、キラキラと光っている

『よぉっシャンクス。来たよ』

「おっ相変わらず早いなお前は」

その海の上に浮かぶ、一隻の船

その船には大きな旗が風に煽られ、忙しなく揺らめいていた

旗には、左目に三つの傷のあるドクロの後ろで剣が交差しているマーク

ドクロという部分からして、海賊旗だという事が分かる

先ほどの声は、船の頭から聞こえていて

一人の少女が、竜を象っている船首の上に座っていた

歳は・・・１７，８歳ぐらい

長い黒髪はクセっけがなく、綺麗なネイビー色の瞳は透き通っている

身長は１６８ｃｍ、体重４５ｋｇ

少し高い背に（自己主張）、平均体重よりも軽い体重
彼女は屈んで、両腕を前に投げ出している形で座っていた
ぶわっと風が吹き、見るからに質の良い黒髪が靡いた
彼女の名前は、クリムゾン・D・シーク。
Dの文字のある人物である
『そーかぁ？俺的には、結構かかったと思うが？？』
「ははっそう謙虚になんなって！早いぞ」
そうかー？っと、少し不満そうに、拗ねるようにシークが言う
そんな彼女を柔らかく見ているのは、シャンクス
・・・そう。かの有名な赤髪のシャンクスとは、彼の事である
『まっ、あんたが喜んでくれたんなら俺はいいよ。』
頭をクシャッと掻きながらにししっと笑う彼女を
「おっうれしいじゃねーか！」
シャンクスが抱きしめた
その瞬間に硬直。またの名を、石化

数秒後、首の辺りからみるみる内に赤くなり

『おっおう／／／』

ふいっと顔を逸らした

っと、そんな二人のところに船のクルー達が集まってくる

「おう、お頭ー。火拳から電話だぜ」

「イチャついてないで、早く出てください」

『いや・・みんな・・分かってくれ・・俺は腹黒女遊び大好きシャンクスに遊ばれてただけだ・・

助けてくれ・・・』

今、クルーから伝電虫を受け取っていたシャンクスが

「おわっ！？」

盛大にこけた

『ぷっ、ダセッ』

「相変わらず酷いな・・シーク。先ほどまでの姿は何処に・・」

『早く出てやれ。エースが可哀想だ』

「泣」

半泣きのシャンクスを他所に

『おーいお前等ぁ！！酒持って来い！飲むぞ！！』

「「「「おおおう！！ガッテンだ姉貴！！」」」」

勝手に酒の準備を始めるシーク

「グスッ。シークの意地悪」

シャンクスがまじ泣きしてたのは、誰もしらない・・

『くすっシャンクスも泣くんだな』

前言撤回。シーク以外誰も知らない

「おー！こっちにも酒運べー！」

「姉貴が料理振舞ってくれるってさ！」

「おっ天国到来だなぁ！」

後ろで飛び交うそんな声を無視しながら、シャンクスを伝電虫に向いた

「どうした、エース」

《どうしたもこうしたもねぇよ!!シークの奴いるだろ!?》

めっちゃ焦ってるエースの声を聞いて、シャンクスはニヤリと笑った

「あぁいるぞ?寂しいのか?」

《いるのかっ!?良かった・・・。あぁ、寂しいよ》

「以外だなぁ・・・お前がそんなに素直に答えるとは・・」

《俺だって、本当に寂しかったら言うに決まってんだろ?》

「でも、そっちに戻るのは1、2週間後になりそうだぞ?」

《はっ?》

今まで普通に話していたエースの声が、一瞬曇った

《・・・なんでだよ?》

彼のドスの聞いた声が、伝電虫から流れてくる

実際にそこにはいないのに、殺気がビンビン来るのが分かった

「もう少し俺のところにおいて置きた《黙れシスコン》嘘嘘」

ははっと笑うも、シャンクスの頬には一筋の汗が伝う

「ルフィに会いたいんだってさ」

《ルフィに？》

たちまちキョトンとした声になる

「あぁ。俺やお前からは何かもらってるだろ？でもルフィからは貰ってないからってなぁ」

《そっそうか・・・》

納得したのだろうか・・声が途切れる

シャンクスはふっと笑うと

「心配するな。そのうち行くだろ？」

《分かってるよ。お前には分かんねぇよ、可愛い妹を心配する兄の気持ちがな》

「俺は、可愛い娘を心配する父親の気持ちなら分かるが？？」

《だれがお前の娘だっ！じゃあな、シャンクス。ありがとよ》

「いいや。又な、エース」

その言葉を最後に、プツンと通信は切れた

・・・・と同時に

「「「「「「『かんぱーい！！』」」」」」」」

後ろから楽しそうな声が・・・

はっとしてシャンクスが振り返れば

『んぐっんぐっぷはぁ！！やっぱ酒はうめぇなぁ！』

「「「「おっ姉さん良い飲みっぷり！！」」」」

クルー達と仲良く戯れながら、酒を豪快に飲んでいく自分の義娘の姿

「・・・エース。お前が心配すんのも、十分分かるぜ・・」

はぁ、と一度嘆息してから

「おいシーク。俺も混ぜろっ！」

『おっ父さんもちＯＫだぜ★』

「お頭も加われー！」

「姉貴の作った料理もあるぜー！」

結局シャンクスも加わり、楽しい宴は朝まで続いたとか・・・

『・・・んっ・・・』

照りつける太陽の光りで、シークは目を覚ました

陽はもう、てっぺんまで昇り、昼になっていた

起き上がれば、先ほどまでの自分と同じように眠っているクルー達

折り重なるようにして寝ている彼らに、自然と笑みが零れた

『ん～・・・頭いてぇ・・飲みすぎたな・・』

気持ち悪そうに顔を顰めて、頭を抱えてから

『・・・まずは、エースに助けを求めよう・・・エースに助けを・・』

そう呻きながら左耳に付いている、炎がハートの形になっているピアスを触れてから

『空間移動（ワプエル）』

そう呟いた一瞬後には、彼女の姿はそこには無かった

所かわって、ここは白ひげ海賊団の船モビー・ディック号

・・・の、食堂

ぐだーっと倒れるように机に突っ伏しているのは、白ひげ海賊団2番隊隊長、

ポートガス・D・エース

火拳のエースと呼ばれている、賞金首だ

いつもぐだーっとしている彼だが、今日は一段とぐだーっとしていた

「うぅー・・2週間近くシークにあえないなんて・・地獄だ・・」

などと、ぶつくさ呟いている

そこへ、

「なぁにしおれてんだよい、エース」

「・・・マルコか・・」

エースの頭を2、3回叩きながら隣へ座ってきたのは

白ひげ海賊団、1番隊隊長マルコ。又の名を不死鳥のマルコである

彼もモチロン賞金首

・・・あれ？モチロンっていうのは、違ってるかなぁ・・・
間違ってないか！
だって、白ひげの隊長だもん。賞金首じゃないと、そうはなれないよね
「だってよぉ・・・シークに・・・」
そこまでいって、上げた首を下した
その様子に、マルコはふぅと息を吐くとエースの頭を小突いた
「なら、着てほしいだの言えばいいよぃ」
何の根拠があるのか
しかし、マルコには自信があった
それは、前にもあったから
――――どうしたんだよぃ、エース
――――シークが・・・一週間来ないって・・
――――なら、呼んでみればいいよぃ
――――なにを根拠に・・
――――あいつはシンシンの実の能力者だよぃ。身体能力も並じゃ

ねぇはずだよぃ

――――シーク・・・！

――――なぁに？

――――！！

――――ほらよ

――――シーク・・・？

――――どうしたの？エース。

――――シーク！！

――――おわっ・・・と。エース、私よりお兄ちゃんなのに寂しがり屋〜

――――なんとでも・・・言え！！

あの日から、シークはマメに会いに来るようになった

一ヶ月間、白ひげで過ごした事もある

そんな彼女は、赤髪にも白ひげにもハートにも面識がある。

・・・が、属してはいない。

自由なのだ。何処までも

それ故、必要としているならば、何時までもいてくれる。
そんなヤツなのである。
そう言われたエースだが、すんなり呼ぶのには少し苦があった
彼女がこれないのは、自分の弟であるルフィに会うためだ。
ならば、邪魔するのは良くない・・・のだが。
ふいに、背中に暖かいモノが触れる。
いや。触れるというか、包み込むように・・・が、正確なのだが
誰かと思うが、確認する気にもなれない。
――――誰かが酔いつぶれたか？
そう思ったが、うつ伏せている状態の、この狭い視界の中でも見えた細い腕を見て驚いた
首元に吐息がかかることから、右腕だと分かるその手首には、
うねうねとうなる様な、複雑にイバラが絡まった様な飾りを施している腕輪が見えた。
見覚えがある。
・・・。見間違えるはずがない。

これは彼女に・・・。シークに自分のあげた腕輪だった

バッと顔を上げれば、横でクツクツと笑い声が聞こえる

横目で睨むように見やると、マルコが笑っていた（分かっていたが）

「なんだよぃ。呼ばなくても、くるんじゃねぇかぁ」

その言葉に、反射的に振り返った

背中からずり落ちそうになった彼女を、片腕で抱えながら覗き込む

確かに・・・その少女はシークだった。

だがしかし、様子が可笑しい。

まるで、悪夢に魘される様に顔を顰めているのだ

エースは、はぁ・・・と嘆息した。

嬉しさと呆れを混じらせた、そんなため息

「全く・・・。だから離したくないんだっつの」

よっと、彼女を肩に乗せ歩き出す。

静かに扉を潜り抜けようと思えば

「おーいエース。シークを襲うんじゃねぇよぃ」

「襲うかっ！／／」

マルコの茶化しに、綺麗に突っ込みを入れたエースだった

部屋の中。

運んだけれど、対応の仕方が全くわからない。

今だにシークはうなっているし、瞳を開ける気配すら感じられない

エースは深く息を吐いた。

ため息ではない。それよりも、もっと深い深い吐息。

顔を合わせたのは3日ぶり。

っといっても、今彼女は自分の姿を見ていないが

ボーっと、けれど全ての神経が目に集中したかのような感覚で、シークを見つめていた

汗は・・・かいていない。

少なくとも、悪夢を見ている訳ではないらしい。

「・・・いいかげん、目ェさませよ・・・」

心配の言葉は、悪態として口から零れた

話せない事で、こんなにもイライラするとは

「俺もガキだな」

ルフィの事言えねーじゃん。と、乾いた声を上げた

『・・・んっ・・』

その声でか、瞳が薄く開かれる

まだ眠いのか、はたまた気分が悪いのか。

彼女の目はトロンとしていた。

しかし、眉間の皺は消えることなく、普通ではない事だけが伺える

「おい、シーク。お前大っ！」

『エース・・・助けろ』

唐突に首に腕を回され、声が詰まるエース。

だが、口調が口調なだけに、いつもの彼女だと苦笑した

『ヤベぇんだよ・・・頭痛いんだよ・・・』

「は？シャンクスの処にいたんだろ？風邪でも引いたか？」

どうやら、頭が痛かったらしい。

人一倍顔に出やすい彼女の表情を見れば、予想も出来たかもしれないが。

シークの前髪をかきあげ、自身の額をくっつける

・・・熱いわけではない。

人並み、である。

まぁ、体温の高い（火だからであるが）自分からしてみれば、冷たいほどだった

少し顔が白いが、貧血ではないのだろうし。

訳が分からず首かしげると、（安心していたのは内緒だ）

『ははっ・・・昨日酒飲み過ぎた（笑）』

・・・・は？

酒ってお前、

「未成年だろっ！？」

『エースは飲んでただろ・・』

一応、突っ込みらしきモノは返してくる。

何時もの元気がないのが、気がかりだが。

ひとまずシークの頭痛の原因が分かったわけであるが、

「どう対処すりゃいいんだよ」

困る。

否、全く分からない訳ではないのだ。

しかし、知っている対処法も1つ。
それは・・
「『寝りゃあ、いい（ん）だろ？』」
うん。
お互いこれだったらしい★
『エース、分かってんなら寝ようぜ』
「あぁ。・・・ん？」
今コイツ、何つった？
『どうした？一緒に寝ようぜ？』
一緒に？
その瞬間に、エースの頬はほんのり赤く染まる
意図は・・・察してやってくれ
不思議そうに首を傾げると、エースの手首を引っ張ってベッドの中に入らせた
そのまま抱きつく。
シークは、エースの胸板に頬を摺り寄せた後、背中に腕を回す

『エースは、昔・・・から、暖・・・かい・・ん・・だ』

最後の方は聞き取れなかったが、彼女が幸せそうな表情になっているのは分かる。

「・・・可愛すぎるだろお前」

笑えないこの状況の中、エースも又、眠りへと落ちていった

『ありがとエース！おかげで死なずにすんだ！！』

あれくらいで死ぬか馬鹿・・・とは言わずに、

「おう。何かあったら、迷わず俺の処に来い」

・・と、言っておいた

『了解』

にししっと無邪気に笑った彼女に手を振ると、数秒後には彼女の姿

は無かった

「又行っちまったな・・」

会うのは2週間あと。

苦痛はあるが、まっ良いって事で

「本当にお前、シークに依存してるよぃ」

「うるせー」

マルコの注告にも似た茶化しを無視し、拳を作る

――――怪我すんなよ

「本当に、アイツに依存してる（笑）」

乾いた笑い声を上げ、部屋へと戻る

『・・・ふむ。さて、どうしたもんか』

顎に手を当て、考える様に首を下へ傾けるシーク。

理由は単純。

翼で飛んできたまでは良かったが、大きな波に飲まれてしまったのだ。

シークは能力者な為、海に落ちればアウト。

それに、シンシンの実の能力者は、コップ一杯分ほどの海水を浴びると、

エンジェルモデルに変わる事が出来ず、ただの人間と化してしまうのだ。

・・・まぁ。誰かからの物を身に着けていれば、話は別なのだが。

問題は其処からなのだ。

波に飲まれた後、意味不明な海面の上昇（爆発といっても過言ではない）が起こり、

上空へと投げ出され、

同じく空を飛んでいた船の中の、歓声を上げながら泣いている一人の青年の上に、

着地してしまったわけだ。

幸いにも、彼は気絶すらせずに、痛みに悶えていた。

『・・・・コイツ。見たことあるんだよ。

うん。』

「意味わかんねーよ！」

『ナイス突っ込み★』

数秒で回復した、下敷きさん。

――――人間じゃねーだろ、おい。

それにもため息を吐きながら周りを見渡す。

当然の事ながら、視線は全て自分に向けられていた。

『あー・・・スミマセン。今すぐ立ち去りまっ！？』

状況を説明しよう。

お詫びの言葉を述べ、立ち上がろうとした瞬間に、飛んでいた船が海面へ着水し

シークはよろけ、海へ落ちそうな状態に・・・・

『あぁ、ゴメンねエース。僕はやっぱり、海で死ぬみたいだよ』

諦めました。

こういう時は、希望を持たないことが大事だって、サッチが言ってた！

シークの体は抵抗する事無く、綺麗な放物線を描きながら海へと落ちていく。

緩やかな浮遊感に瞳を閉じた瞬間・・・

「落ちるなぁぁぁぁぁ！！！！」

青年らしき叫びが聞こえたのもつかの間、自分の体がもの凄いスピードで

何かに引っ張られる。

・・・は？

疑問を口にする事すら出来ぬまま、彼女は誰かに抱きとめられる

「「ともよ！！」」

その瞬間（とき）に、後ろから二つの声。

「「さぁ、行け！」」

力強く、そして慈愛に満ちている叫びだった。

その船の旗・・・ドクロを掲げている帆が風にはためき、

バタバタと音を立てた。

「みんな！俺はな、いつかエルバフへ、戦士の村へ行くぞ！！」

「おう、ヤー！！」

長鼻・・・ウソップが高らかと宣言し、麦わら海賊団船長、
モンキー・D・ルフィも、それに応える様に叫んだ。
シークはといえば・・・
『・・・放せ。いい加減開放してくれぇ！！』
今だにルフィの腕の中にいました（笑）
彼女の瞳は潤んでいて、苦しそうに頬を赤くいていた
『お前は・・・殺す気か！』
「ん？あっ、悪りい。」
自分でも気づいていなかったのか、はたまた気づいていたのか。
ルフィは今まで力いっぱい抱きしめていたシークを、開放した。
ケホッケホッ、と、乾いた数回の咳の後に、少し深めに息を吸い・・・
『お前の名前は？』
俯いていた顔を上げ、麦わら帽子の少年に聞いた。
――――何故だ。見覚えがありまくりじゃないか。
名前の候補はあるが、一応確認のために聞いておく。

彼は無邪気に、にししっと笑うと、麦わら帽子をシークに被らせた

「俺はモンキー・D・ルフィ。覚えてねーのか？シーク」

やはり。

予想とは、時として当たるものである。

彼女の予想も又、当たったのだ。

麦わら帽子を手に取り、胸に抱きながら同じように笑う。

『覚えてるよっルフィ！』

言ったと同時か、それ以前か。

ルフィに思い切り抱きしめられる。

シークも、ルフィの背中に腕を回した。

『てめェ、いつの間にか賞金首になりやがって！！』

「にししっシークもだろ！」

微笑ましい光景。

・・・言っている事を除けば

「おい、ルフィ。そいつ・・・誰なんだ？」

うん。

君の疑問は間違ってないよ。

シークは嘆息すると、乱れたシャツを整える様に叩いた

『初めまして。俺の名前はクリムゾン・D・シーク。宜しく、ウソップ』

「えっ？何で俺の名前・・・」

否、普通知ってるでしょ。

『だってお前、ヤソップさんの息子だろ？』

「！？」

いや、驚かれても困るのだが

「とにかく気にすんなよウソップ。後で説明すっからよー」

『そーゆー事だ』

「てきとーだなおい！」

ウソップの突っ込みを受け流し、少し甲板の上を歩いてみる

後ろから、

「「エルバフエルバフ～きぃ、きょ、巨人～」」

っと陽気な歌が聞こえてくるのを思えば、ウソップはあまり気にしていないらしい

それにしても

『ルフィの奴。すげーメンバー揃えやがったな』

海賊狩りのロロノア・ゾロ。

黒足のサンジ。

泥棒猫のナミ。

狙撃主のウソップ。

まだ人数は少ないが、海賊をして行く上では、十分に揃っているのだ

「あいつら元気ね・・・」

見張り台の根元に寄りかかりながら、一人ため息を吐いている女。

『そうだな。なんつーか、只の馬鹿だよな（笑）』

「えっ・・・」

遠慮無く、普通に話しかけたシークを、驚いた様に凝視しているナミ。

「あなたは・・・」

警戒は無いみたいだが、疑いは解いていない

『俺？俺はシーク。後でルフィから何かあるよ』

「そう・・・。」

何とか、一先ず、この場は凌いだらしい

「何だか私・・・さっきので疲れちゃった」

『さっきの？』

ナミの横に座り込み、話を聞いていたシークが首を傾げた

「えぇ。巨人達の事だったんだけど」

『あぁ。

第零話　～幼き日々の思い出～

それは、今から１０年ほど前。

イーストブルー。

フーシャ村。

平和に人々が暮らすその裏に、人々が立ち入ろうともしない、コルボ山がある

――――そこは、強い者しか生きられない弱い者には死がある場所・・・

「だから！！じいちゃん！！うにぃぃぃぃ！！」

ある一人の少年が、一人の男に持ち上げられていた。

雑に、である。

少年の頬はまるでゴムのように伸び、ボールのようにハネながら揺れていた

黒髪に黒瞳の少年である。
先ほどの言葉を思えば、持ち上げている人物は、彼の祖父なのだろう
「俺は海賊王にいい！！」
なりたい――――そう言いたかったのだろう。
しかし、それは祖父である、モンキー・D・ガープに遮られた
「なぁにが海賊王じゃ！」
「いいいだ！！」
ガープは叫ぶと同時に、掴んでいた頬に力を入れた為
ルフィの叫びが、薄暗い森の中に響く
『・・・ルフィ、痛そう・・・』
もう一人、少女がいた。
ガープの後ろ・・・いや。ルフィの反対側というのが適切だ
その少女は、黒髪に深いネイビーの瞳。
赤い、錆色のワンピースを羽織っていた
彼女の言葉に、彼とガープが反応する。

彼はモンキー・D・ルフィ。

彼女はクリムゾン・D・シーク。

表情は薄いものの、眉を下げて、必死に”可哀想”という感情を作る

「大丈夫じゃ！そんなに力はいれておらん」

ニカっと笑うガープとは対照的に、

「痛い！痛いってば！じーちゃん！！」

物凄く痛そうに喚くルフィ。

シークはルフィ側へ行くと、頭を撫でる。

『ゴメン・・・ね。助けて、あげられない・・・から』

悲しそうに呟いた。

「大丈夫だ！シークは悪くｎ・・・いってぇぇぇぇ！！」

「女子（おなご）の前だけで格好をつけるな！」

弁解も虚しく、ガープに再びしごかれる

シークは薄く。

本当に、注意して見ていないと分からない程度で苦笑した。

勿論、声などは出していない

小さめになっていた歩幅が、元に戻る

「離せ～！」

ルフィが手足を暴れさせ

『（ルフィ・・・、頑張れ）』

心の中でエールを送るシーク。

ガープは、片手をポケットに突っ込み、柄が悪そうに目つきを尖らせた

「全く・・。悪魔の実まで食っておいて、ふざけた口をたたきやがって・・。」

完全に、一種の愚痴である。

数秒の間を空け、ガープが息を吸い・・・

「エースもルフィもシークも！いずれは最強の海兵になるんじゃい！！」

唾が散るほど激しく、怒鳴るように叫んだガープだったが

『・・・・？』

不思議そうに首を傾げたシークに、少し言葉を詰まらせる

「いっててて・・・。俺ゴムなのに、なんでいてーんだ・・・。」

ルフィは相変わらず喚き、森の向こうが少し見えたところで息を吸った

其れは又、シークも一緒で

「『離してくれよ！／離してあげて・・・、じーちゃん！！！！／じーちゃん・・・』」

二人で叫んだ（といってもシークは普通の音量だが）

ルフィはともかくとし、シークの言葉に反応したガープだが、嘆息するだけだった

「全く・・・お前等を生ぬるいフーシャ村なんかに置いたのが間違いじゃったわい・・・」

自分にも向けられている事だと分かったシークは、大人しく静かに歩き出す。

勿論かれには・・・・・そんな言葉は通じない

「なんだよー！！シークは怒らなくてもいいじゃねーか！！！」

ルフィの叫びに、ガープはかっと瞳を見開いた

「誰のせいじゃ！誰の！このっバカタレが！」

流石はガープ。（といっても、何が流石かは知らないが）ルフィよりも、
数倍は大きい声量で叫び返した。
それにムっときたのか。
あるいは、もともとそうしようと思っていたのか。
ルフィは近くにあった大木に腕を回し、動かないようにしがみつく
ガープは気づかないのか、そのまま歩き出す・・・
そのため、引っ張られていた頬が、有り得ないほど伸びた。
「全く・・・あの赤髪のシャンクスなどとつるみよって・・・」
悪態を吐きながら歩いているガープには、
今起こっている事態など、気づく気配が全くない。
「俺はシャンクスみたいな・・・」
ズボッ
派手な音を立てて、ルフィがしがみ付いていた大樹が根こそぎ空中へ飛び、
ゴムの反動で、ガープの後頭部へと・・・・

ガンッ　　「ごふぁっ！？」

『！』

あまりの痛々しい光景に、目を手で覆う。

「強い男になるんだ！」

「こらァァァァァァ！！！！！」

激しい叫び声によって、驚いた様に目を開ければ・・・

「ふぉへ・・・？」

ガープの頭にあたって断たれたのか、大樹の残骸らしきモノが

自分のすぐ隣に倒れていた

ダンッ！ダンダンッ！

止め処ない、力強いノック音を遠めに、シークはルフィの隣に座っていた

最近思うが、このワンピースは少し短い。

・・・かといって、他にワンピースが無いのが問題なのだが

固く握られた。・・・否、握り合っている右手にだけ意識をむけ、

後はほとんど、ぼーっとしていた。

――――ここは何処なのだろうか・・・

浮かんで来た疑問に、応えはしない――――応えられない。

それは当然の事だ。

自分はその答を知らないのだから。

――――何故自分は此処にいるのだろうか・・・

新たに浮かんできた疑問にも、応える事は出来ない。

浮かんでは消え、浮かんでは消して。

その繰り返しを続けていると、

「なんだ此処？」

応える者はいない。

かといって彼も、答を待っているわけではないだろう。

「シーク。行こうぜ！」

――――彼は何故、私と一緒に・・・

「シーク？シーク！！」

『へ？』

何度呼ばれたか。

解らない――――別に知らなくてもいいのだが――――とにかく呼ばれ続け、

何度目かで、自分が呼ばれている事に気づいた。

声を上げた時点で思考は止まる。

何だろうと思い。ルフィを見上げれば

「なんだか知らねーけど、面白そうだから行こうぜ！」

そう言って、ニカっと笑った

あァ。きっと彼は退屈なんだ。

私もなんだけどっ

『うん！行って、みようか』

握られた右手を引かれ、勢いにまかせて体を起こす。

吐いていない筈の泥を払うかの様に、左手でワンピースの裾を叩(はた)いた

行くといっても、何処へは知らないし、此処が何処だかも知らない。

ただ、隣で手を引きながら走るルフィを見れば、只退屈で何かしたかっただけだと分かった

何回目かのノック音で、荒々しく扉が開かれた

「やかましィィィィィよ！！！いったい何処の命知らずだい！」

「わしじゃ」

「は”っ”！？うあああああ！！ガ、ガープさん！」

「「ひいいいいい！？」」

後ずさり、身を竦めながら叫び声を上げたのは、分からなくも無い。

先程のガープは・・・怖すぎる。

後ずさしたのは確か・・ダダンと言っただろうか。

カーリー・ダダン。

それが、少し風貌の悪い、肥えた彼女の名前であった。

少し興味があった為、数秒間見つめるが、

「シークゥ〜」

ルフィのつまらなさそうな声で、顔を移す。

声に反映しているというか、彼の表情に声が反映しているというか。

とにかく、口調と声音に似合った、面白くなさそうな表情をしていた。

・・・ルフィがコレに、興味がある訳ない・・・か。

『ゴメン、ネ…ルフィ。行こっか』

「おう！」

たちまち明るくなった彼の顔を見て微笑みながら、地面を蹴った

「元気そうじゃな」

「じょーだんじゃ無ーよ！！本当ボチボチ勘弁しておくれよォ！！」

二人の声を聞きながら、私はルフィと走っていた。

・・何故聞こえるかって？

そんなの・・・

「おい、シーク！風が気持ち良いぞ！」

『そうだね、ルフィ。』

ごもっともな感想を述べながら、ガープの周りをグルグルと走るルフィ。

あ、私もか。

とにかく、行く処も無いから、ガープの周りを永遠にループしていた訳である。

「エースの奴、もう十歳だよ！？」

エース。

聞きなれない単語に疑問を持ちながらも、止まらず走り続ける

「そうか、もうそんなか。元気にしとるか！」

ガッハッハッハと、豪快に笑うガープを、シークは横目に見やった。

いい歳してるのに、笑顔は青年のソレそのものである。

「笑ってる場合じゃねーよ。これ以上我々は手に負えねーよ」

ダダンの右斜め前に立っている、背の小さい男が弱音にも似た事を言った

何と言うか・・・実にユニークで、可愛い声だった。

「シークーシークー」

『？』

隣で名前を呼ばれた為、顔を向けるが

彼は只真っ直ぐに前を見据え、無邪気に笑っていただけだった

「俺、お前と一緒に入れて嬉しいんだ！

確かに、憧れはシャンクスだけど・・・シークだって大好きだ！」

待って・・・イキナリ何ですか、その告白的な？

あまりの突然発言に数秒をようし、頭を何とかついていかせる

そして、次に出てきたのは

『うん。私も、ルフィの事、大好き！』

笑顔だった。

その事が嬉しかったのか、ルフィは笑みを深めると、走る速度を上げた

勿論、私もそれについていく

ひっきりなしにルフィの笑い声が聞こえ、ダダンの視線が気になる。

――――怖いのですが（汗）

「それに、レフェの奴も、もう１０歳ですぜィー」

さっきの不思議声（勝手に命名）さんの言葉で、先ほどよりも大きな笑い声が聞こえた

「そーかそーか！！レフェの奴も、もう１０か！！！」

こりゃーめでたいと聞こえるのを耳の奥に閉じ込める。

――・・・レフェ？

何処かで聞いた事のある、その名前に疑問を持ちながらも、私は走り続けた

風になって！↑

もう何度過ぎたか分からないガープさんの前を通り過ぎた時だった。

「そんなことより」

「そんな事って人の話！！」

講義の声をあげた不思議声さんの、言い終わるか否かで

「邪魔くせーんだよ、このガキャあ！！！」

怒鳴られました（泣）

突然の事にシークが肩を震わせれば、

「おわっ」　『ひぁっ』

ガープに抱えられた。

否、正確に言えばルフィは”猫掴み”され、シークが抱きかかえられていた。

何事かとルフィと顔を見合わせ、ダダンさん達を見やる。

「コイツ等も頼む」

「は？」　（は？）

ダダンさんの声と、私の心の声は見事に重なった

ルフィはなんとも無いらしいが（まず気にしていないのだろう）、

私は目を白黒させていた。

それはもう、何時ぞやのギャグマンガ的に←

その事に気づいたのか、ガープがシークの背中をポンポンと軽く叩く。

『！』

そこで、シークは無事現実世界に戻ってこれた。

少し不安でガープを見上げれば、大丈夫だと言わんばかりの笑顔。

――あ・・・ちょっと、安心（照）

やはり子供は純粋なのが一番です（作者談）

「これルフィ、シーク。挨拶せい」

ガープの声で、ルフィが片腕を上げて応えた。

顔はなんともまぬけな感じで、挨拶には不釣合いな程ほのぼのとしていた。

「よっ。」

しかもこれだけ。

『あの、初めまして。しーくです。・・・あ、シークです！』

私も人の事、言えませんでしたけど！！

っと、挨拶がすんだとたんに

「なんなんですかー。そのガキンチョ達。」

今まで一言も喋っていない男が口を開いた。

口調というか、声というか、服装というか、姿というか。

とにかくまぁ、全てにおいてゆ～っくりした印象の男であった。

赤い鶏冠の様な鶏ヘアー。

うん。鶏さんで決定↑笑

そんな事を頭で考えてはいたが、やはり子供か。

あまり深い思考回路には入っていかない。

・・・否。彼女なら深く深く考えてしまうかもしれないが。

言いたい事はただひとつ。

考えるの飽きました！！

何か楽しくなる方法を教えて！！銀八先生↑（パクリました。空知先生ゴメン笑ｂｙ作者）

・・・うん。

答は・・・来なかったよ。当たり前なのだが。

とにかく、飽きてしまったモノは仕方がない。

そんな理由でルフィを見やれば、

「・・・」

黙って、少し喉の奥で唸っていた。

彼もまた、暇なのであろう。最初からなのだが。

鶏さんが喋ってから数秒、（つまりシークの思考は数秒以下以内になされていたと考えられる）

ガープはさらっと、自分は男であうとでも言うかのように、

「わしの孫じゃ。二人共な」

爆弾を落とした。

何故爆弾なのか？それは、

「「「えっ・・？

ええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！？？？」

」」

ダダン達の悲鳴でわかってくれたと思う。

山全体に響くような大声で、

「もう二人増えるーーーー！！！」←不思議声

「ガープの〇×▲☆、ガープさんの孫ぉぉぉぉぉ！！？」←ダダン

一通り叫んだ後。

「「「無理です」」」

断言した。

しかも三人で同時に。

更に正座で、だ。

その上には、腕を組みながら三人を見下ろすガープ。

いかにも、説教されている様に見えるぞ。

ガープは浅く嘆息すると、三人を真っ直ぐに見据え、

とても落ち着いた声音で

「よし。じゃあ選べお前等。

豚箱で一生を終えるか、コイツ等を育てるか。」

そこで明らかに声の調子が変わった。

見えてはいないが。

あの後すぐに開放され、ルフィと一緒の森を眺めていたのだ。

特に眺めるモノも無いが、走っていても面白くない。
やはり繋がれている右手はあまり気にせず、何処までも奥へと続く闇を見据えていた。
視覚はそのままに、再び耳を会話に傾ける・・・・

「目を瞑ってやってるお前等の罪は、星の数だ」
ニヒルな笑みと共に、爽やかに言い切ったガープ。
・・・それ、完全なる脅しですから。
その笑みからか、言葉からか。
「「「そんなァ～～」」」
三人が弱弱しく不満の声をあげた
「時々監獄の方が良いんじゃニーかって、エース一人だけでも手に負えねぇーのによぉ」
一番に声を上げた不思議声・・・ドグラに続くように、ダダンんも声を上げる
「それに加えて、あんたの孫って・・・
どうせ怪物みたいなんでしょ？あのガキも～」

嘆く様に言ったダダンに、少しだけチクリとする。

・・・そう。

私は、普通の人間じゃない。

戻る方法も分からなければ、どうしてこうなったかも分からない。

生まれながらにしての、化け物。

キュっと唇をかみ締めて、ルフィの右手に力を込めた。

「・・・？」

それに気づいたのか、首を傾げたルフィが、数秒を要して目を見開いた。

流石、全く気にしていなかった様子。

そんな彼に笑みが零れるのと同時に、ルフィはくるりと体を回転させた。

それは、必然的にも、私自身も巻き込まれるわけで。

扱けそうになりながら、何とか踏みとどまった時だった。

「ボロッチー山小屋」

ルフィが、少し皮肉を込めてそう言った。

――――ダダンに向かって。

「ぶっ飛ばすぞコルァ！！」

『っ！？』

何故か体が大きくなった様に見えたダダンに驚いたが、

「シーク！行こうぜっ」

蜻蛉を追いかけて走っていくルフィに引っ張られ、九死に一生を得た。

あのままいたら、確実に睨み殺されてました、私。

ふう。と、安堵の息を吐いて、ルフィの横へと並んだ。

後ろでドガっ、という音（恐らく誰かが扱けた）と共に、

ドグラとマグラの声が聞こえた。

振り返ろうとしたのと同時に、ルフィが急に止まった為に未遂に終わってしまった。

『イテ…』

彼の背中に勢い良く打つかってしまったからか、鼻がジンジンする。

うぅ、痛い・・・

何回か鼻を擦り、ルフィの見つめている方向へと顔を向けた。
…と、同時に、顔に何か降って来る。
「おいっお前！！」
横から聞こえてくる、ルフィの叫び声に、
若干耳を痛めながら、空いている左手で顔に掛かっている物体を持ち上げた。
それは、
『…君影草？』
白い蕾を、幾つも携えた君影草の花束だった。
幾重にも重なる君影草の茎に、何かの蔓を巻きつけただけの、
お世辞にも綺麗とは言えないモノだったが。
…というか、考えるのはそこではない。
何故、君影草がこんな処にあるのか、
何故、自分に降って来たのか。
疑問に頭をフル稼働しながら、君影草の事について考えてみる。
ユリ科に属する、有毒植物。

地域によっては、鈴蘭とも言うらしい。
強心配糖体のコンバラトキシン、コンバラマリン、コンバロシド等を含む。
多く生息するのは、寒い地方だと言うが・・・
何で、コルボ山にあるのだろうか？
弱肉強食の基にあるコルボ山だから、君影草の毒に堪えられる生物も、
生息していて可笑しくないはずなのに・・・
それに、周りは雑草だらけ、死骸に残骸、
一見栄養になりそうで、その真逆になってしまうモノしか無いこの山。
なのに、何故・・・？
不思議に思いながらも、花は基本的に好きだから、ありがたく貰うことにして、
ルフィの叫んでいた方向へと、視線を上げた。
謝罪を要求しているルフィは、岩に座っている少年二人に叫んでいたらしい。

一人は、黒髪に鋭い目つき。そして、頬の雀斑が印象の少年。
もう一人は、少し長めの黒髪を後ろで１つに縛っている、柔らかい瞳の少年だった。
二人の内、後者には見覚えがある。
…誰だっけ？
そう思って首を傾げれば、
「おっ！！エースにレフェじゃないか！！」
離れていても十分過ぎる程聞こえるガープの声が聞こえた。
そして、その後ろで帰ってきた！っと、声を上げたマグラもいた。
長い鉄棒を持ち、不満そうに顔をゆがめている少年。
名を、ポートガス・Ｄ・エース。
その隣で、読んでいた分厚い本を閉じた少年。
名を、クリムゾン・Ｄ・レフェ。
ガープが呼んだ名前に、やっぱりと頷く。
レフェは、絶対に知ってる人だ。

左手に持っている君影草を抱直して、岩に腰を降ろしている二人を見据えた。

エース…は、目が合った後にすぐに逸らし、

レフェは、笑いかけてくれた。

何となく嬉しくて、私も微笑んだ。

「おい！！謝れ！！」

未だに叫んでいるルフィに苦笑して、後ろから歩いてきたガープを見上げた。

彼は何時もの様に、豪快に笑いながら私の頭をグシャグシャと撫でた。

「ルフィ、シーク、あいつ等がエースとレフェじゃ」

予想通りの名前にほっとして、再び視線を戻す。

「歳はお前らよりも三つ上。

これから、コイツ等と一緒に暮らすんじゃ」

へーっと、私が声を漏らすよりも早く、

「「「「えぇぇぇぇ！？」」」」

「そんな・・・勝手に・・・」

三人の叫び声の後に、ダダンの落胆した様な言葉が聞こえた。

…えっと、何かゴメンナサイ…

胸中でそう呟き、少し嬉しさに笑みを零す。

独りぼっちだった頃が、嘘みたい。

少し前の自分を思い出してしたら、ガープに肩を叩かれた。

『・・・？』

その行動の真意が分からず、首を傾げれば

レフェの方を指差しながら、ニカっと笑った。

「シーク、レフェがお前の兄だ」

『え・・？』

驚いた私の前に、１０ｃｍはある身長さのレフェが岩から飛び降りてきた。

…何て言われるんだろう…

少しビクビクしながら言葉を待っていると、ふわっと、頭を撫でられた。

レフェに。

彼は膝を曲げ、私に目線を合わせながら、先ほどの様に微笑んだ。
「久しぶり。…っつっても、覚えてないかな？」
乾いた笑い声を零した彼に、フルフルと首を左右させる。
『…覚えてる。』
兄に対してなのに、やっぱり口下手になってしまう自分に悔しくなる。
それでもレフェは、嫌な顔をせずに、私を抱き上げた。
行き成りの事に、驚いている私を他所に、レフェは私をエースへと見せ付けた。
「どうだっエース！！
言ったとおり、俺とお前の妹は可愛かっただろ？」
嬉しそうに笑うレフェとは対照的に、エースは少し顔を歪めた。
「俺のじゃなくて、お前のだろーが。」
「トゲトゲすんなよ、エース。
俺もシークも、お前の従兄妹なんだからよ。」
従兄妹という単語に、少し首を傾げる。
レフェが兄であることは分かった。

エースが兄と私の従兄妹であることも。

従兄妹・・・？

疑問の量に耐え切れなくなり、私はレフェの服の袖を引っ張った。

「・・ん。どうした？シーク」

不思議そうに小首を傾げた兄に、おずおずと口を開いた。

『えと、エース・・・も、お兄ちゃんなの？』

聞いたと同時に、少し俯いてしまう。

違うと否定されれば、少なからず傷付いてしまうからだ。

そんな私の意図を見透かした様に、レフェはにこりと微笑んだ。

「あぁ、その通りだ。

俺達は、血が繋がっているんだ」

――――血が繋がっているのよ。

彼と、見知らぬ女性の言葉が被った。

周りの景色がシャットダウンされ、女性の声しか響かなくなる。

――――貴女に力を授けたのは私です。

・・・誰？

――――分からないのも仕方がありません。

でも、１つだけ知っていてほしいのです。

知っていて、ほしい？

――――えぇ。

貴女の力はいずれ大きなモノとなるでしょう。

貴女は、必要とされているのですよ。

だんだんと掠れて行く女性の声に、反射的に叫んだ。

お母さん！！！

○家族●

もういなくたって

家族にはかわり無いのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5103s/

ONE PIECE　神の巫女

2011年10月7日20時00分発行